

Research Note

„Womit muss der Anfang der Philosophie gemacht werden, oder was ist das Prinzip (arche) aller Seienden?“

Yukihito SANO

Für Hegel soll der Anfang der Wissenschaft „Sein“ sein. Allein „Sein“ ist nur <Womit des Anfangs>, wovon die noch nicht entwickelte Wissenschaft als <Anfang als solcher> unterschieden werden muss, der mit der absoluten Idee als der wirklich entwickelten Wissenschaft identisch ist. „Sein“ gehört dem Sagbaren, während die absolute Idee selbst als der spekulative Satz dem Unsagbaren gehört. Der Widerspruch beider macht <Anfangen> und die weitere dialektische Bewegung möglich. Also das Prinzip aller Seienden ist mehr der Widerspruch des Sagbaren und des Unsagbaren als Anfang als solcher als das Unsagbare. Der Widerspruch beider macht nicht nur das Wesen des Menschen sondern auch die Überraschung <thaumazein> aus, die sonst der Anfang der Philosophie sein soll, wie man zu sagen pflegt.

〈研究ノート〉

哲学は何をもって始められなければならないか、 あるいは万有のアルケーは何か

佐野 之人

はじめに

ヘーゲルの『大論理学』に「学は何をもってはじめられなければならないのか (Womit muss der Anfang der Wissenschaft gemacht werden?)」というタイトルをもった箇所があります。「元初論 (始原論)」と呼びならわされている有名な箇所です。ヘーゲルは「有 (存在)」をもって学は始められなければならない、という結論を導き出しますが、それは「何をもって始めるか」の「何をもって」に対する答え、つまり「始まりの何をもって (Womit des Anfangs)」と言うべきでしょう。それからは始まりがそこから始まるころのもの、つまり未展開の内にある「学そのもの」が、その「始まりそのもの (Anfang als solcher)」として区別されなければなりません。この「始まりそのもの」こそが古来「アルケー」と呼ばれてきたものです。「アルケー」とは元来①昔そこから、という意味と②今もすべての有るものの基になっている、という二つの意味を併せ持った古代ギリシャ語です。ですから「万有のアルケー」とはあらゆる有るものの時間的な始まりと原理的な始まりを併せ持ったものです。それで「アルケー」は「始原 (始源)」とか「元初」というように訳されます。

哲学という営みは従来、この原理としてのアルケーをどこまでも探究するという、その意味で愛知 (フィロソフィア) の営みであると同時に、この原理からすべてを説明するという体系的完結的な学を目指すという営みであるという矛盾した有り方を自らの内に含んでいたと言えるでしょう。ある原理から哲学を始めるとなると、原理の探求は打ち切らなければなりません。そうなるとうしてその原理から始めるのか、という問いを覚悟しなければなりません。しかし一定の原理から始めることなくして学は始まらないように見えます。ここに哲学が含む愛知と学の矛盾、アポリアがあります。

ヘーゲルにとってこの「元初そのもの」は「絶対理念」とか「絶対精神」、あるいは「絶対者」と呼ばれるものであると考えられます。これは一面的な命

題の形で言い表すことのできるものではありません。つまりこれという仕方
で言語に言い表すことのできないものです（この言い方がすでにこれという仕方
で言語に言い表していることに注意してください）。これを言語に言い表すと、
そうしてヘーゲルはそれが必然だと言うのですが、「有る！」としか言えない、
と言うのです。もちろん言語に言い表すことのできないものと「有る」とは異
なっています。そこから弁証法の運動が起こることになります。

それはともかく、このように「元初（始まり）そのもの」と「有る」とが区
別されると同時に、それらが結び付けられることで「始まる」ということが
成立するのです。「始まりそのもの」のままではまだ「始まり」ではありません
し、「有る」ではすでに始まってしまっています。その意味で「元初（始まり）
そのもの（Anfang als solcher）」は「有る」を「媒辞（Womit des Anfangs
Mitte）」として「始まる（anfangen）」と考えることができるでしょう。ここに
Anfang als solcher —Mitte— anfangenという推理式が成立していますが、Anfang
als solcherは言語に言い表すことのできないものであるのに対し、Womit des
Anfangs (=有る) は言葉です。ですから「始まる（anfangen）」ということはそ
の内に、言葉にならないものと言葉とを結びつけるという矛盾を抱えていると
考えざるを得ません。そのことはそもそも「始まる」ということが無から有へ
の移行であることを考えても分かると思います。この「無」は言語に言い表さ
れたものではありません。

もっともこのように言葉にならないものと言葉とを媒介することで始まる
ということが成立する、というのはすでに始まったところから事後的に説明した
ものです。しかも学の最後（絶対理念）まで見通した視点からの説明というこ
とになります。一般的に言っても始まりは終わりと関係づけられることで始め
て「始まり」であることができます。

ヘーゲルの体系は言語に言い表すことのできないものと言語との矛盾から始
まり、この矛盾が原動力となって、その後の弁証法的な運動が惹き起こされて
いると考えることができます。そうしてすべての言い表されたものがそこへと
没落していくと同時に、そこから必然的な契機として復活して学的体系となる、
その「そこ」がすべてのものがそこから始まったところの「言語に言い表すこ
とのできないもの」です。こうしてヘーゲルの学的体系は円環をなすことにな
ります。円環の出発点にして終着点は言葉に言い表すことのできないものです。
その意味では言語的でしかありえない意識や有限な悟性にとってはどこまでも
分らないものです。ですからこれを展開した学もこれで完成した唯一の学で

ある、とは言えないことになります。本（もと）がどこまでも分からないものなので。事実ヘーゲルは体系を何度も改訂しています。プラトンは『国家』篇を7度書き換えたが、自分は77回書き換える時間が欲しい、などと言っています（その一週間後にヘーゲルは急逝します）。

ヘーゲルは哲学が抱えるアポリア、すなわちどこまでも原理の探求であると同時にすべてをその原理で説明しなければならないというアポリアをある意味で解決したと言えます。学の体系を円環にすることによって、学の始まりが学の終りによって根拠づけられることになるからです。しかしその解決は言語内に収まるものではありません。むしろ言語と言語に言い表すことのできないものとの深い矛盾の上に成り立っていると言えます。

テーマは「哲学は何をもって始められなければならないか、あるいは万有のアルケーは何か」でした。この問いは厳密に言えば異なっています。ヘーゲル哲学に即して言えば（と言っても、これは一つの解釈であり、ヘーゲルがそのように言っているわけではありませんが）、「万有のアルケーは何か」に対する答えは「絶対理念」等と呼ばれる「言語に言い表すことのできないもの」であり、「哲学は何をもって始められなければならないか」の答えは「有る」になると思います。この二つが結び付く所に「始まる」という矛盾した事柄が生起するのです。

しかし一般的に言ってもこの二つの問いは違うものだと考えられるでしょう。「哲学は何をもって始められなければならないか」という問いは「哲学の始まり」という主観的な事柄であるのに対し、「万有のアルケーは何か」とはそうした主観的な始まりとは別の客観的な始まりを問うていると考えられるからです。ここには二つの世界が前提されています。その一つは人間の認識から独立に存在する世界であり、もう一つは人間の主観的な世界です。この二つの世界の内どちらが根本的かについては議論の分かれる所でしょう。一方で物と自我という存在が経験に先立って有るから認識が成り立つと思われまし、他方では物と自我という存在自体、あるいはそれらの関係として認識が成り立つということ自体が認識の中の出来事だとも考えられるからです。後者のように考える場合、我々は認識を一步も出ることができません。そこでここでは認識から独立な存在を根本と考えるか、それとも認識を根本と考えるか、この対立から入って一步一步確認しながら進めていきたいと思っています。

哲学は何をもって始められなければならないか、あるいは万有のアルケーは何か

まず我々は認識の外に有るものを認識することはできません。「認識の外」というのもすでに認識です。これに対し「認識の外（前）がすでに認識だというのは、後付けの論理である」と言われようとも、我々が意識（認識）を一步も出ることができない、そのことは素直に認めざるを得ないと思います。

その上で「意識（認識）とは何か」をさらに考えてみたいと思います。さしあたりそれは、分かっている、とか理解していること、すなわち分別しつつ統一していることであると考えられます。AをBなどのAでないものから区別し、これ等を客観として、主観である自分から区別しつつ、これ等を統一的に理解することです。私は目の前の花を他の花や花でない物から区別します。そうして「自分」から「この花」を区別し、「自分」が「この花」を見ている、そのように判断します。これが日常の意識であり、認識です。しかしこのような見方では花の美しさに心を奪われることはないでしょう。音楽もこのような聴き方では何も聞こえては来ないでしょう。

そのような日常的「意識」が成立するために何が必要か、考えてみましょう。意識が分別しつつ統一することであれば、そこに①分別しつつ統一する力が必要です。これが「自己」です。また②分別され統一されるものが必要となります。これは自己に対して「与えられたもの」です。自己の対象となるべき全体です。さらに③分別しつつ統一する仕方、形式が必要です。カテゴリー、言葉、枠組みなどがこれに相当します。今も①と②と③に分別しつつ統一していますが、これもすでに①、②、③に拠っています。①と②と③は等しく根源的であると考えられます。自己と全体がまずあって、それから全体が自己に対して与えられたり、自己が全体を対象としたりするものではありません。自己が働き始めるのと全体が与えられるのは同時です。

①の「自己」は対象化できません。対象化された自己はすでに「自己」そのものではありません。また「対象化できないもの」というのもすでに対象化です。同様に「全体」も対象化できません。対象化された全体は、自己と対立しており、自己と全体がこのように区別され関係しあっている以上、真の全体はこの両者を含む全体でなければならないからです。この「与えられたもの」は「自己」がすでにそこにおいて生きている世界、物や事が関係し合う全体であると考えられます。この全体は対象化できません。対象化すれば対象化しているという事実を含めたものが全体となります。

こうして我々は一方で (a) 意識のあり方を一歩も出ることのできない身でありながら、他方で (b) 対象化できない自己、物・事の世界をすでに生きていることとなります。(a) が意識の世界であるとすれば (b) は意識できない世界（無意識の世界）と申せましょう。

(a) と (b) は相互に包含し合いながら、矛盾した関係にあり、この矛盾が人間の本性を形成していると考えられます。意識が何をどう認識し、考え、行為したとしてもそのこと自体が事実であり、(b) の世界の出来事です。そのような仕方では (b) は (a) を含んでいます。このような (b) の世界の出来事そのものは決して意識されません。意識したとすれば、その意識していることが事実となるからです。しかし逆にこのように意識されない世界について（「意識できない」というように）意識することがすでに (a) の世界での出来事です。その意味で (a) も (b) を含んでいると言えます。(a) と (b) は矛盾しており、この矛盾が解決することはありません。

(a) と (b) で①自己、②世界、③言葉のあり方が本質的に異なってきます。「自己」は (a) の世界では意識的な自己です。その自己は自己存在に最大の関心を示す日常的な自己です。しかしそのように自己存在に最大の関心を示すということは、自己の内に存在に関する深い不安、すなわち自分が有るのか無いのか分からないという不安を日常的な自己が、その意識の如何に関わらず、抱えていることを示しています。これに対し (b) における自己は、生ずることも滅することもありません。対象化できないということは形がないということです。形のないものは生ずることも滅することもありません。この不生不滅の自己は無相の自己でもあります。

②の「世界（物・事）」は (a) の世界では自己の人生観、世界観によって理解された世界ということになります。これに対し (b) の世界では、真の全体です。分別的な意識では真の全体は捉えられません。全体と部分を分けてしまうからです。全体と部分を分けるならば、全体は部分と対立し、それ自身対立項の一方として部分と全体を包む全体の部分になってしまいます。ですから真の全体では部分は全体であり、全体は部分でなければなりません。これはどのように考えたらよいのでしょうか。有機体をイメージしたらよいかもしれません。どの部分も他と異なりながら、全体を構成する不可欠の部分であると同時に、どの部分も全体を映している、そのような全体と部分の関係です。最近では「one for all, all for one（一人は全てのために、全ては一人のために）」というように、理想的なチームワークのあり方を表す言葉として人口に膾炙しているようです。

ここでは自己を含め、全ての物・事が互いに通じ合っています。

③の「言葉(カテゴリー、枠組み)」も(a)と(b)で本質的に異なっています。(a)における言葉は対象化可能な言葉です。これに対し(b)における言葉は対象化できない言葉です。(a)における言葉が「言分け」の言葉であり、分別知であり、思惑であるのに対し、(b)における言葉は「身分け」の言葉、身体知であり、アイデアの知であると言えるでしょう。

(a)と(b)がこのように矛盾している所に人間の本质があるのですが、そうであるからこそ、(a)の意識が破れ、(b)が開かれる、ということが人間に起りうることとなります。それは同時に(b)によって(a)のあり方が照らされるということでもあります。こうした日常的な経験を破る根本経験の存在によって、(a)と(b)の矛盾としての人間存在が証されます。

そのような根本経験には1)フロー型と2)ブレイクスルー型があります。フロー型の根本経験は意識から入ります。型(外枠)から入り、その型を忘れるのがフロー型です。これに対しブレイクスルー型は自分から入ることができません。そうして型(外枠)そのものが破れるのがブレイクスルー型の特徴です。順にもう少し詳しく見て行きましょう。

フロー型が意識ないし型(外枠)から入る、というのは何をするかを決めている、ということです。野球をする場合でしたら野球をする、さらにバッティングをする、しかもどのような仕方ですらバッティングを行うかを予め決めていくということです。しかし経験の具体的な内容を決めてかかっているわけではありません。外枠だけ決めておいてあとはフリーにしておくのです。そうして与えられた現前の事柄に意識を集中していきます。集中するとはその事柄に徹する、成り切るといことです。こうしてもはや意識する必要が無くなったところで日常的な分別的自己が消去され、無心の境地が現出します。

集中するということをもう少し丁寧に説明しましょう。話の場合でしたら外枠(型)に当たるものは、例えばこの場がどういう場であるか、誰に向かって話をしているか、話のテーマは何か、といったことです。ここだけ決めておく。そうして「その場にピッタリとした言葉が何か」を「その場」との対話の中で探し(問う)、決め(定める)、実際に置いてみる(行う)、その結果起ること(相手の反応など)からさらにさらに対話を進める、このような「問う」、「定める」、「行う」、というプロセスを繰り返すことに意識を集中する。こうした繰り返しの内で、自分のやろうとしていることとその実現の間に間隙が無くなった状態が、フローです。チクセントミハイはフローの条件に「CSバランス」、すなわちチャ

レンジとスキルのバランスを挙げています。自らの技量に比べて目標があまりに高いとストレスが大きく、フローは実現しませんし、逆に低すぎても駄目です。西田幾多郎は主客未分の純粹経験とは、意識の厳密なる統一の状態であるとし、それは「意志と実現の間に間隙のない」状態であるとしています。目的と実現の間に間隙のないあり方においては、行為の内に目的が内在しますから、その行為自体が目的となります。例えば歩くことも、どこかに到着することが目的ではなく、歩くこと自体が目的となる、ということです。チクセントミハイはこれを「自己目的的」と呼び、これもフローの条件に挙げています。目的が外にある場合は、それが達成されない間は不満足の状態にあり、その達成までの遅速が問題となり、こうした行為の全体が時間の内にあることとなります。これに対し目的内在的な行為においてはその行為自体で充足しており、常に満足の状態にあります。また遅速も問題とならず、従って時間の内にありません。こうしてフローでは時間の質が変化します。集中状態では雑念のない質の高い経験が現成していますから、時間がゆっくり流れているように感じられるのに、終わってみるとあっという間に長時間が経っていた、というようなことが起こります。

自己目的的な行為は意識集中という緊張の頂点において得られる解放感であり、我々に大きな快をもたらします。これが遊びの構造であり、楽しむことの構造です。遊ぶのは何か別の目的があって遊ぶものではありません。遊ぶために遊ぶのです。楽しむために楽しむのです。遊ぶとは楽しむことです。スポーツも基本的には遊びです。勝利することに楽しみを見いだすか、上達することに楽しみを見いだすか、コミュニケーションの内に楽しみを見いだすか、あるいはスポーツをすること自体に楽しみを見出すか、などの楽しみ方の違いがあるだけです。

このような構造をもつものはすべて遊びです。ゲームでもギャンブルでもそうです。アルコールなどの嗜好品や薬物などもこうした遊びに属しますが、これらは特別なスキルを必要とするところはありません。人間には楽をして手っ取り早く結果である解放感、快をえようとする傾向があります。一度このような経験をすると、なかなかそこから抜け出られなくなります。これが依存と呼ばれるものです。遊びが持つ自己目的的という構造は自己完結な構造ですから、遊びは絶えずその自己完結を破ってさらに刺激の強い快を求める自己拡大的な傾向をもちます。ここに歯止めがかからなくなると遊びは極めて危険なものとなり、人間に破滅をもたらすものとなります。

人間とは何かという問いのない遊びは単なる娯楽です。こうした単なる娯楽は大きなストレスを抱えた「人間」には必要です。しかし何故人間が悲しみと
いった大きなストレスを抱えているのか、こうした悲しみが人間にいたずらに
起るのでないとしたら、我々は人間とは何かという問いに向き合わなければな
りません。人間とは何かの探求に基づく遊びはすでに遊びではなく、「道」と
呼ばれるにふさわしいものです。それは人間とは何かの気づきにつながって
いきます。これが「学び」であり、ここにも楽しみがあり、しかもこの学びはど
こまでも深まっていくものでもあります。

この「気づき」がブレイクスルー型の根本経験に関係しています。フロー型
の根本経験は型（外枠）から入り、型を忘れる所に現成します。しかしフロー
経験はその型（外枠）の中で起こります。フロー経験の中で型が忘れられると
言っても型がなくなるわけではありません。これに対しこの型（外枠、枠組み）
そのものが突破されてしまうのがブレイクスルーです。フロー経験は型（外枠）
から意識的に入っていきませんが、ブレイクスルーは自分から入っていくことは
できません。それは枠組みが壊れるような何かに出会うことによって驚き、気
づかされるといふ形をとります。気づきは仕事や趣味などの日常の個々の事柄
においても起こりますが、人間の根底を支えるような根本的な枠組み、人間と
は何かというような問いに係る枠組みに関しても起こります。死や罪、絶望、
偉大な人物や書物、作品との出会いなどがそうした経験の契機となりえます。

フロー型、ブレイクスルー型の根本経験において、(a) の意識が破れ、我々
は (b) の対象化できない世界に触れることとなります。とはいえこの世界は
対象化できませんから、意識することも理解することもできません。この「触
れる」ことを宗教では「聞」、「見」、「証（悟り）」などと表現しますし、哲学
でも「知的直観」という語を用いて表現する哲学者がいます。これ等は深みに
触れた時の開けを言葉にしたものです。人間は言葉にし、意識しなければ意識
に対しては何も顕にはなりません。こうして人間は「分かった気」になります。
しかし言葉にされ、意識されたものはすでに「事実（対象化できない世界）」
でもなければ、「知的直観」でもありません。ですから「俺は悟った」とか「私
は救われている」ということを意識しつつ語る者は妄想を語っていることにな
ると思います。どこまでも分からない、深いものである、あるいはどこまでも
救われない、という人間に不可避の側面を忘れているからです。こうして人間
はさらに探究し、「分からなくなる」、「深みに触れる」、これをどこまでも繰り返
す以外にありません。それはどこまでも深い自分、人間、物・事を経験して

いくということです。

根本経験において何が起っているかをさらに哲学してみましょう。根本経験において (a) の意識が破れ、我々に (b) が開かれます。(b) (=事実) が開かれていること (=知的直観) は言葉 (判断) を通じてしか意識 (a) に顕になりません。しかし意識に顕になったものは事実でも知的直観でもありません。ところが我々が言葉に表し、判断し、意識することができるのは、事実が開け、知的な直観が成立しているからです。知的直観が我々に与えられているということ、これは我々に全体が与えられている、ということです。しかしそれは意識にとっては全くの未規定なものとして現われざるを得ません。我々は意識としては感性的直観しか持ちえません。我々は (a) と (b) の矛盾した世界を同時に生きていると言わなければなりません。否、我々自身がこうした矛盾なのです。

「万有のアルケーは何か」がテーマでした。あらゆる「有る」といわれるものの根源は何か。それは (a) 意識 (認識) ではありません。意識はそれだけで成立しないからです。意識は決して対象化されない「自己」と「全体」を必要としていました。この対象化されない領域が事実 (存在) の領域です。「対象化されない」とは認識 (意識) されないということです。それ故それは認識を超越した「存在」の領域、すなわち (b) の世界です。しかし (b) が「万有のアルケー」でもありません。認識を超越したものを認識しえないというのは自明の理だからです。また認識しえない「存在」という「アルケー」を設定すること自体が認識の領域の出来事であることを忘れてはならないでしょう。こうして「万有のアルケー」とはむしろ (a) と (b) の矛盾であると考えられます。これについて以下に述べようと思います。

「万有のアルケー」とはあらゆる「有るもの」の根源です。ですからその根源は「有るもの」ではありません。その根源は「事実」(b) の直覚 (直観) としては充実した「有る」ですが、意識にとっては「有る」とも「無い」とも言えないものです。意識にとって「有る」とか「無い」とか言えるものは主語に立ちうるもの、「有るもの」です。ところが知的直観の「有る」は主客に分けることのできないもの、したがって主語として立てることのできないものです。「美そのもの」、「三角形そのもの」などの「イデア」もこのようにして直観されるものと考えられます。

このように考えると「万有のアルケー」は (b) であるように思われますが、すでに申し上げましたように (b) は「万有のアルケー」ではありません。(b)

を捉えようとすると言葉となり、意識の領域 (a) に属するものになります。(b) は (a) が破れることを通じてのみ (b) として直観において顕わになります。この直観において例えば「有る」が現前し、意識はこれを言葉に表して「有る」と言い表します。このようにして意識に「有る」が顕になります。意識が理解し、言い表した「有る」はすでに主語として立ちうる「有るもの」であり、事実としての「有る」そのものではありません。とはいえこのような仕方では意識にもたらさない限り、「有る」は意識に対して顕になりません。それはともかく (a) と (b) の矛盾故に「有る」は直観および意識に顕になります。それ故 (a) と (b) の矛盾が「有る」とあらゆる「有るもの」の根源（万有のアルケー）であり、有論（存在論）の根源だと言えらると思います。

「万有のアルケー」としての (a) と (b) の矛盾は同時に「哲学の始まり」としての「驚き」でもあります。「驚き」は意識ではありません。意識を破るから「驚き」と言うのです。こうして「驚き」において顕になったものを意識の側から「何であるか」と問うのが哲学です。それ故哲学は「驚き」において顕になった根源を「何であるか」と端的に問うことをもって始まりますが、それは始まりの「〇〇をもって」(Womit des Anfangs) にすぎません。始まりそのものは (Anfang als solcher) はやはり (a) と (b) の矛盾であると申せましょう。矛盾があるからこそ「驚き」があり、「問い」が起こるのです。また逆に「問い」と「驚き」の存在が (a) と (b) の矛盾として人間存在、意識と事実（直観）の間（意識と事実の「と」）として人間存在を証しているのです。

最後に (a) と (b) の矛盾を人間経験の深まりに関連づけてお話して締めくくりとしたいと思います。人間は常に「今」「此処」「自分」を生きています。しかし「今」「此処」「自分」は対象化し、これ等を全体の中の部分という仕方では相対化し、位置づけ意味づけを行わなければ意識にとっては全く無内容なものとなってしまいます。例えば「今は今だ」「此処は此処だ」「自分は自分だ」としか言えない者に私たちは大した思考力を認めることはできないでしょう。「今」「此処」「自分」は個別的と呼ばれるものですが、この個別的なものを全体（一般）の中でどれだけ豊かに捉えるかに応じて、「今」「此処」「自分」は豊かになります。しかしこのような仕方では「今」「此処」「自分」をどれほど豊かにしたところで「今」「此処」「自分」そのものに出会うことはできない、というのも明らかなことです。それらが対象化された「今」「此処」「自分」だからです。しかし「今」「此処」「自分」は対象化しない限り意識に顕になることはありません。この意識に顕になった「今」「此処」「自分」が破れることを通じてのみ、

我々は「今」「此处」「自分」の無限の深みに触れ、これにピッタリした言葉を与えることを通じて意識における「今」「此处」「自分」が深まることとなります。このようにどこまでも人間経験を深めて行く身が定まること、これこそが教養であり、人間（学生）が何よりも先に教育を通じて身に着けるべきものであると思います。